

防衛大学校本科第11期学生及び理工学研究科第4期学生 卒業式における学校長式辞（昭和42年3月18日）

本日、本科第11期学生及び研究科第4期学生の卒業式を挙行いたしましたところ、防衛庁長官^{注(1)}をはじめ、内外多数の来賓ならびに卒業学生の父兄の皆様方を新装なれるこの式場^{注(2)}にお迎えできましたことは、卒業学生はもとより、われわれ一同にとり無上の光栄であります。各位のご光来は、栄えある卒業式に一層陸離^{りくり}たる光彩を添えるものでありまして、ここに衷心からお礼を申し上げる次第であります。

本科・研究科の卒業生諸君、卒業おめでとう。本科の諸君は昭和38年4月、全国多数の志願者の中から

激しい試験に打ち勝って入校せられました。本日、ご列席の父兄の皆様方は、その当時いくばくかの不安と期待をもって本校に託されたわが子・わが弟が、かくもたくましく成長した姿に接し、心強く感じておられることと思います。私も今や学を終えた495名の若人を、陸・海・空の自衛隊に送りうることに大きな誇りと喜びとを感じております。

研究科の諸君は、昭和40年4月、部隊等の勤務を離れて入校以来、先生方の特別な指導の下に、高度の科学・技術の研究に専念して来られたのであります。いずれの諸君も、それぞれの専門分野において立派な研究業績を収められました。諸君は再び部隊・機関等に帰り、重要な業務を担当されるのでありますが、私は諸君の在校中における寝食を忘れての努力に対し敬意を表するとともに、今後本校において研鑽された高度の知識を十二分に発揮して、各自衛隊等の進歩に貢献せられるよう心から期待する次第であります。

本科の諸君、本日の式典にあたり、小原台上における4年間の生活



第2代学校長 大森 寛

注(1) 増田甲子七

注(2) 球技用体育館

を回顧し、いろいろな思い出が胸中に去来していることであろうと思います。級友と朝な夕なの起居を共にした学生隊生活は、時には窮屈な自由なき生活と感じたことがあるかもしれません。しかし今や、その生活の中から規律の尊さを知り、自由には責任を伴うものであることを理解し、しかも自主自律の気風を学んだことを悟られたであろうと考えます。また、苦しかったカッターレースや断郊競技においても、体力の限度に自信を高め、燃えあがるファイトに不撓の気力を養われたことと思います。

諸君は、勉学に大部分の精力を費やされたことはいうまでもありません。諸君の学んだものは職業的な専門教育ではありません。人文・社会科学を中心とする一般教育と理工学の専門教育において、諸君は広い視野を開き、豊かな人間性を培い、科学的な思考力を養うために多くのものを学びました。同時に幾たびかの訓練や防衛学の学習を通じ、初歩的段階ではあるが軍事専門的能力の錬成にも努力しました。

本校における4年間の生活を通じ、諸君は立派な幹部自衛官としての基礎的資質、すなわち社会人として同時に武人として、欠くことのできない教養と識能とを身につけられたわけであります。私は、諸君が本校において学ばれたこれらの資質を基礎として、将来幹部自衛官として大成せられるよう期待しております。

私は、しばしば諸君と食事を共にしながら懇談討論をしたことをなつかしく思い出します。諸君は、よく「われわれは大学生です」と言いました。私は正直にいて、初め幹部自衛官となる立場にある諸君からこの言葉を聞いて、少し奇異の感をいただきました。しかし将来の幹部自衛官は、広くかつ高い大学的教養が必要であるという観点から、やがて諸君の考え方に同調し、諸君はさらに真理の探求に意欲を燃やし、道義心の高揚に努めてほしいと要望しました。

一方私は、わが国防の担い手として諸君がいかなる心構えをもっているか、すなわち、自衛官の使命観について問いたただきました。それに対し、ある学生はこう言いました。「自分は自分なりに自衛官としての使命観をもつよう努力した。しかし、一旦こうだと決心しても新聞の論調を読み、世論を聞くとまたその決心が揺らぐ。自分の仲間には不動の信念をもっている学生もいるが、中には悩み迷い、自衛官としてわが国の防衛に挺身するのに、なお決心がつかない人物もいる」というのです。

私はこの答えを聞いて、これは本校の教育上重要な問題だと思いました。私は、諸君が国防の担い手としての心構えに一本筋の通った大学生

であって欲しいと思っているのです。またこれは、国民の諸君に対する期待でもあるのです。そこで、「防衛大学校のみが現在の世論から隔絶した存在であることは難しいし、わが国防には、諸外国と比較してみると解決を要する多くの難問題があるのも事実だが、与えられた環境の中において深く古今の歴史に学び、広く世界の実情を認識して、わが国の防衛に関する正しい理解をもつことが必要である」と諸君に話しました。われわれは、なぜ国を護らなければならないのか、国防の理念とは何か、という問題について諸君といろいろ議論をしました。

私は、「すべての日本人は現在平和を願っている。否、日本人だけではない、平和は世界人類の理想である。国防の任に当る者は、この人類の理想の追求において、決して人後に落ちてはならない。国防の目的は戦争をすることではなく、戦争を阻止・抑制して人類の理想の達成に寄与することである」と言いました。平和の理想について語りながら、他面諸君と共に人類の数千年の歴史を回顧し、第2次世界大戦後のわずか20年あまりの間においても、40に及ぶ局地的武力紛争の発生している国際情勢を検討し、かつ現在の国際社会におけるわが国のもつきわめて重要な立場についての認識を新たにし、わが国が侵略を受けないという保証は何人もできないだろうとの結論に達しました。

そこで私は、率直に次のように申しました。外国から不法に侵略を受け、男は殺され女は^{はずかし}辱められ、平和で自由な生活は踏みにじられ、文化は破壊され、日本民族の誇りと独立が奪われるような事態を黙視することはできない。平和国家の理想は民族の独立より尊いから、いかなる事態に至っても武力を放棄すべきであるという考え方には同意できない。反対に日本民族の安全と独立なくして日本人の平和な生活はあり得ない、と心の奥底に秘めている気持ちを赤裸々に述べました。そしてこれは、昭和25年以来、陸上自衛隊に職を奉じてきた15年間に得た確信であると言いました。ある学生の意見を中心に諸君と以上のような話をしました。

本日この話を繰り返しながらも、私は自分の気持ちを諸君におしつける考えはありません。ましてや諸君を一つの型にはめようとは思っていません。むしろ現在の一部世論に対し諸君が反発を感ずるのあまり、感情的に悲壮感を抱いたり、独善的なエリート意識に陥ることを戒めねばならないと思っています。諸君はあくまでも冷静に自から考えて、国防の理念はいかにあるべきかについて、正しい結論をもってほしいと念願しています。しかし諸君はなお学半ばであり、客観的にものを判断しう

る立場にも恵まれないため、真剣に考えれば考えるほど心に迷いを生ずるというのも、あながち無理ではないと思います。この問題は、諸君がこれからの生涯を国防の担い手として歩んで行くについて、最も重要な意味をもつものです。したがって私は、諸君と別れるこの卒業式の壇上からも、自衛官として第一歩を踏み出される諸君に対し、討論した内容を思い出しながら、さらにこの問題について話しかけたい気持ちを抑えることができません。

本校を愛し、しばしば来校せられ、われわれにご講話をしてくださった小泉信三先生は次のように言っておられます。

この日本の国土は日本人のものであり、日本人のみのものであるということは吾々にとって真に張り合いのあることです。吾々はこの国土を祖先から受け継いでこれを子孫に伝えるのでありますが、その吾々にこの国土を伝えるのも、吾々からそれを受け継ぐものも共に皆な同じ日本語を語り同じ心で国旗を仰ぐ日本人であるのは幸せなことではありませんか。吾々は祖先から受け継いだ日本の国土をただそのまま次の世代に引き渡すのを恥づべきだと思います。吾々が吾々以前の日本人によって造られたものの恩恵に浴するよう^みに吾々も亦た吾々の造ったもの若しくは付け加えたものの恩恵を与えねばならぬ。吾々が住みその上に吾々が生きている日本の国土というものは決して与えられたままのものではなくて日本人によって造られたものだといわなければなりません。無形の文化についても同様です。宗教・道徳・学問・芸術の凡てを包む日本の文化というものは吾々はそれを祖先から受けて子孫に伝えるのでありますが、受けたそのままを伝えるのではなくて常に何物かを望むらくは多くのものをそれに付け加えよりよいもの、より大きいものにして次の時代に伝えることをすべきであります。

また、先生は次のように言っておられます。

吾々が祖先から受け継いだ日本をよりよきものとして子孫に伝えるといってもその日本という国が他国から侵されない独立の存在を保っているの^みでなければ話になりません。その日本の国を護るものは誰れか。それは日本人以外にはありません。世界の国々の国民は皆な自から国を護るけれどもひとり日本人だけはその必要がないというような

ことを説くものがあればそれは人を欺くものです。

これは昭和30年3月に小泉先生が出版された『遺児の皆さんへ』という本の中の一節です。非常に感銘の深い言葉であって、われわれが国を護らなければならない理由をあますところなく説いております。私はなんらの所見を加える必要がないと思います。また先生は、「日本国民というものはこの国土という空間に過去・現在・未来という時間を通じて生きているものだということができ、そこで自然に吾々は国民として現在と過去と未来に対する義務を感ずることになる」と言っておられます。

私は諸君が自衛官として国の護りに任ずる使命観のよりどころは、この日本人としての過去・現在・未来に通ずる歴史的な責任感ではないかと思えます。西暦700年頃から防人^{さきもり}が北九州の護りに任じ、元寇の役には鎌倉武士や九州所在の武士が国難に当たったことは、われわれの良く知っている事実です。明治以降においては、陸・海軍がその役割を担当してきました。時代は移り主権者は代っても、日本の国や民族の流れは大昔から現在まで変わりなく続いています。この国を思い国民に尽くす真心は、父祖の血の中を通じ代々受け継がれているのではないのでしょうか。安易な復古と無批判な伝統受入れは避けなければならないという議論は私も知っています。しかし、防人^{さきもり}の歌として今に残っている歌には、父母妻子との別離をよむ素朴さの中に国に尽くす忠誠心がうかがえますし、特攻隊として散った同期の桜達の愛国の至情は、われわれの胸を強く打つものがあることは否定できません。

私は、千数百年をへだてたこれらの防人^{さきもり}の心境に相通ずるものを感じます。この日本の歴史を通ずる国を護り国民に尽くす伝統こそ、国防の担い手としてそれを受け継ぐ自衛官の誇りであり、心のよりどころではないかと思っています。

諸君は、4年間学んだこの防衛大学校、思い出多いこの小原台を去るにあたり、この問題についてもう一度自分の心に問うてみてください。これが卒業式にあたり私の諸君に贈る^{はなむけ}「餞」の言葉です。

これをもって式辞といたします。